OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 芥川龍之介の未定稿小説「全印度が……」の諸典拠と位置付け |
| Author(s) | 高, 子瑜 |
| Citation | 日本語・日本文化研究. 2022, 32, p. 123-137 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/90723 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 芥川龍之介の未定稿小説「全印度が……」の諸典拠と位置付け

高　子瑜

## 一、はじめに

芥川龍之介の未定稿小説には、「羅生門」（『帝国文学』、大４・11）と近い時期に執筆された、それと多くの共通項が見られるとされる「全印度が……」という作品がある。この作品は芥川生前未発表のままとなっていたが、葛巻義敏によって『図書』九九号（岩波書店、昭33・10）に初めて公開され、後に同氏が編集した『芥川龍之介未定稿集』（同、昭43・２、以下、『未定稿集』と略す）の「別稿　他」に収められた。現在、そのノート断片と関連メモが山梨県立文学館に所蔵されており、同館編『芥川龍之介資料集　図版２』（平５・11、以下、『資料集２』と略す）で写真版を閲覧することができる。

「全印度が……」は未定稿であるが、内容の上で作品としての完成度が高いと言える。分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約一〇枚である。『未定稿集』における本文[1]では、小説は大沙門瞿曇（釈迦）が沙羅双樹の林で涅槃に入る日を以て時代背景を設定して始まる。クシャラという吠舎城の物乞いが如何に朝から熱病で苦しんでいたかを語った後、彼が起きてあてもなく市をさ迷っていた様子がありありと描写される。その後、クシャラは細い路地に入り込んで横になっており、日が暮れると彼を襲ってくるぼんやりとした恐怖感が表現される。この時に悉達（釈迦）が市で病人を救ったことや彼が瀕死であるという噂を思い出し、クシャラの胸にある、自分を救いに来ないという悉達への怨恨が混ざって、悉達の神通力と救済に対する懐疑の念は次第に増大していく。最後、翌朝クシャラの死骸が露地で見出され、市の人は無造作に葬ってしまうことが告げられて物語が終わる。

この作について、管見の範囲では、「羅生門」との関連、アンドレーエフ文学からの受容が論じられていること[2]を除けば、ほぼ注目されてこなかった。本稿では、典拠研究の角度から考察を行い、この作には森鴎外の翻訳（アンドレーエフ「歯痛」）のみならず、堀謙徳編の仏教美術書（仏伝文学書）の『美術上の釈迦』（博文館、明43・10）、木下杢太郎の仏陀に関する戯曲「印度王と太子」（『三田文学』、明43・５）も取り入れられたことを明らかにする。また、「全印度が……」の関連ノートと諸典拠の検証により、この作の執筆時期は一高入学して間もない頃ではないかと推定する。その推定する時期を前提として、執筆当時の芥川と文壇の状況を考慮に入れつつ、「全印度が……」はどう位置付けられるべきかについて私見を述べる。

## 二、「全印度が……」のノート断片と関連メモ

本節では、まず「全印度が……」のノート断片における葛巻の編集作業を見ていく。そして、芥川の学生時代のノート「貝多羅葉１」で書き留められている「全印度が……」の

関連メモに目を向けて、関連メモを含むメモ群を翻刻する上で、『美術上の釈迦』の記述と対照することで、これらのメモは『美術上の釈迦』から抜き出したものであることを検証する。つまり、『美術上の釈迦』は「全印度が……」の典拠の一つであることを証明する。

『資料集 2 』を紐解くと、「全印度が……」のノート断片、つまり「ノート「全印度が」」と題されるものは、「 1 」から「22」まで番号が振られた二二枚に及ぶノートの断片からなる（以下、番号のみを示す）。「 1 」から「 7 」までは、その右上隅に太い筆跡で書かれた丸番号「①」〜「⑥」が順に付されている（「 2 」は関連性がなく飛ばした）。この六枚の中にある記述は「全印度が……」本文のほとんどに対応する。人名、地名が「――」印を以て一旦伏せられている箇所や、消線を引いて傍に訂正・加筆を施した箇所が幾分あるが、全体的に言えば、この部分は定稿にそう遠くない段階でのものと思える。上記の「――」箇所が太い筆跡で囲まれ、隣の余白部で各々「A参考」か「B参考」と書き添えられている。太い筆跡は本文の細字とは異なり、葛巻によって書き入れられたものと見做される。ちなみに、「 1 」の最右端に太い筆跡で書かれた大きい文字「題名〔全印度が……〕」が見え、この未定稿のタイトルが葛巻によって仮に付けられたことがわかる（「図 1 」を参照）。

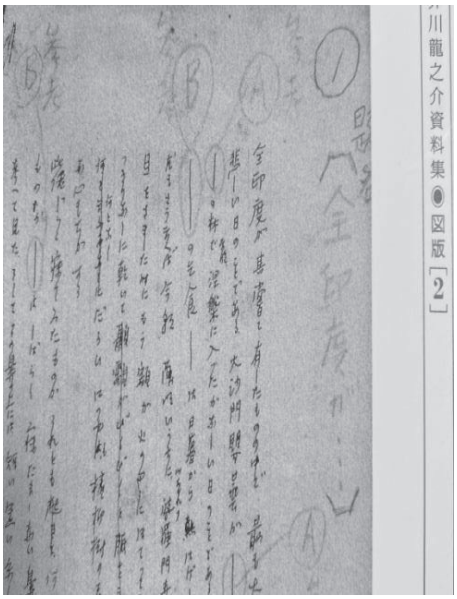

図 1:「ノート「全印度が」 1 」の一部

「 7 」以降では、別作品の構想、下書き、落書、スケッチなどが大半を占めるが、「全印度が……」と関わりの深い記述も数多混在する。特に「 9 」「10」「11」「13」「15」「17」などでは、本文上の文章を執拗に書き直した多種のバリアントが存在し、執筆の際に芥川が推敲を繰り返していたことを窺わせる。その中で、「 9 」「10」「17」あたりでは、伏せられていた人名、地名が、ここにあるバリアントの中で補完されている。人名、地名の箇所が同じ

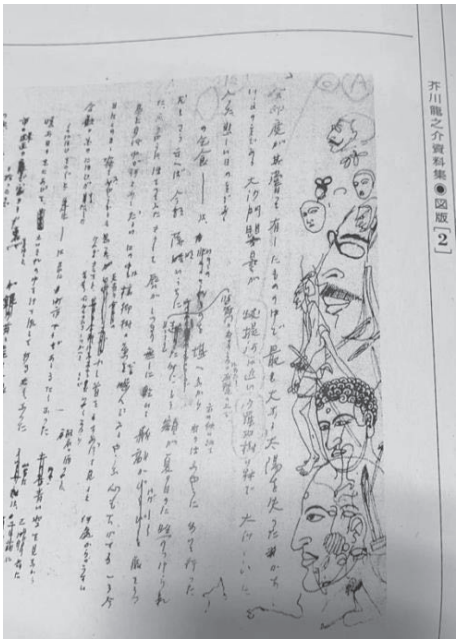

図 2:「ノート「全印度が」 9 」の一部

ような太い筆跡で囲まれており、余白部には「A」か「B」が記載されている（「図 2 」を参照）。『芥川龍之介資料集解説』（山梨県立文学館、平 5 ・11、以下、『資料集解説』と略す）で石割透氏が述べている通りに（p. 89）、葛巻はここでの人名、地名を抜き出して、前文で芥川が後に埋めるつもりであった「――」印の箇所を適宜補填していたと推測される。ノート断片のほかの余白部にも葛巻による編集作業に関わる書き入れが若干あるが説明を省略する[3] 。

一方、関連メモは、学生時代の芥川のノートとされる「貝多羅葉 1 」冒頭での何頁かに記されている。「貝多羅葉」という総題で四冊のノートがあり、何れも雑記帳として使われている。作品創作の下書き、また手紙、短歌などを書く際のメモ、デッサンなど、多様性に富むものが残されている[4] 。「貝多羅葉 1 」は四五枚九〇頁の分量を有し、「 1-1 」から「1-86」まで番号が付けられている（六頁の白紙部分は削除された。以下、番号のみを示す）。石割氏は『資料集解説』で（p. 86）、「「 1-5 」「 1-6 」あたりは、『芥川龍之介未定稿集』の「別稿他」に活字化されている。「全印度が……」のメモであり、それまでの記述も、そのためのメモかもしれない」と説明している。

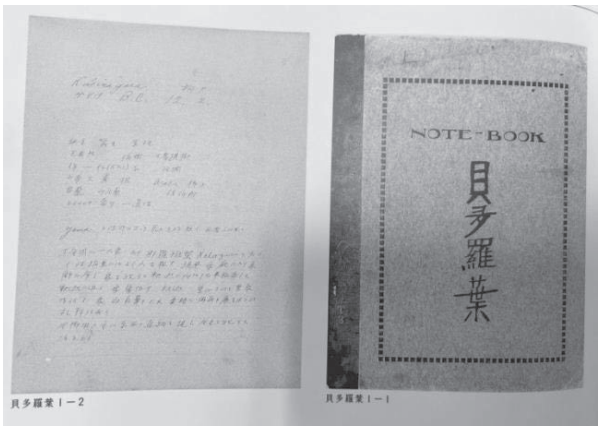

図3:「貝多羅葉 1-1 」と「貝多羅葉 1-2 」

石割氏が述べる「それまでの記述」が指すのは、「 1-5 」の前の四枚のノート（「図 3 」「図 4 」を参照）にあることであろう。まず「 1-1 」では、ノート「貝多羅葉 1 」の表紙が写されており、真ん中に「貝多羅葉」という、標題として縦書き表記の四つの大きい文字が見える。「 1-4 」では、右端に「朱彝尊字錫鬯号竹垞」の字句が縦書きで書かれて、中央から左端まで合計八行の漢詩文が書き込まれている[5] 。

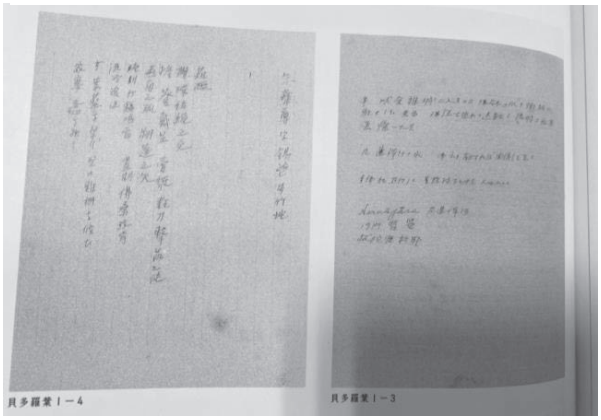

図4:「貝多羅葉 1-3 」と「貝多羅葉 1-4 」

「 1-2 」「 1-3 」には仏教文学に関係するメモ群がある。「 1-3 」のほうを先に見れば、次のような横書き表記のメモが書かれている（翻刻は引用者、「□」は判読困難の箇所、適宜漢字を現行のものに改める、以下同。改行、空白はそのまま）。

佛　吠舎離城に入るのは　佛鉢の水を街路に
散ぜしむ　悪鬼　佛徳を恐れて退散し　満城の病者
悉癒へたり
尼　蓮禅河の水　佛之を飲すれば曲流して来る
□佛独□行して　菩提樹下をゆく　大地ふるふ
Nerañjara　尼蓮禅河
沙門　瞿　曇
跋陀羅斯耶

冒頭の三行のメモは、「全印度が……」の後半部でクシャラが聞いている仏伝説話（釈迦の伝記伝説にまつわる説話）と一致する。「彼（クシャラ、引用者注）は、久しい前から悉達の事を聞いてゐる。悉達が舎琴碓の市に入つた時佛体の水を、市の路に、ちらさせるとすべての悪鬼が悉く退れ去つて市中の病者は、皆一時に快くなつたと云ふ（p. 350）」とある。そのため、冒頭の三行のメモは「全印度が……」の創作メモと認められる。

芥川がいかなる書物に基づいてこのメモを付けたかというと、答えは堀謙徳編『美術上の釈迦』[6]（以下、節名のみを示す）であることはほぼ確実である。同書の第五六節「吠舎離城の遊化」には上記の三行のメモとほぼ同じ記述が見られる。「佛進んで吠舎離城に入り、佛鉢の水を街路に散ぜしむ。悪鬼佛徳を恐れて退散し、満都の病者皆な全く癒へ（p. 184）」と記されている[7]。また、同書の第四四節「三迦葉の改宗」には、「或いは佛の水を用ひんとするや、尼連禅河曲流して佛の所に来る等（p. 143）」という記述が見え、上記の四行目のメモと対応することができる。さらに、同書の第三二節「菩提樹下の誓願」には、「乃ち菩提樹を右遶し（中略）毎時大地の激震を生ず（p. 100）」との記述もあり、上記の五行目のメモはこれに近似すると言えよう。後ろから三行のメモについては、「沙門瞿曇」は釈迦の別名として、「尼蓮禅河」（パーリ語名：Nerañjarā）は河畔で釈迦が悟りを開いたという河名として、『美術上の釈迦』の中に多く出ている。

次に「1-2」を見ると、大まかに分類すると、三段の横書きのメモが書き込まれている。（便宜上、適宜改行、空白を空ける。番号付けは引用者）。

① Kuśinagara.　拘尸　487　B.C.　12. 2.
②□芒果林　榕樹　菩提樹 . 棉―紅（大□）□　棕櫚　小麦　大麦　稲　areca　椰子 . 甘藍　印度藍　檳榔樹　セイロンの象牙―眞珠
③□は大河長く光照く　死者之に至る
王舎城に一大象あり　那羅祇梨　Nālāgiri と名づく　性猛悪にして　よく人を殺す　提婆　象厩に入り　象師に命じ　象を放ちて釈迦に向はしむ　象　狂奔して釈迦に進む　象　衆怕す　釈迦　慈心を以て悪象を伏す　象　即　長鼻をたれ　柔順に佛前の塵をはらひ　礼拝して去る
舎衛城の象は東西の通路を現し　金光を放ちてを□とく

①では、「拘尸」は「拘尸城」（サンスクリット語名：Kuśinagara）のことを指す。拘尸城の外の沙羅双樹の下で釈迦が入滅したことは、『美術上の釈迦』の第八七節「佛入滅の霊地」の冒頭（p. 247）で記されている。「 487　B.C.　12̇2̇ . 2. 」という一連の数字は、恐らく釈迦の入滅の期日を意味するであろう。同書の第九〇節「大般涅槃」の冒頭（p. 253）での「西暦紀元前約四百八十七年、陰暦二月十五日、大覚の佛陀は遂に入滅し給ふ」という記述と対照になろう。①は、「全印度が……」の書き出し、「沙門瞿曇が跋提河の近くにある沙羅双樹の林で涅槃に入つたかなしい日」云々の文章を想起させる。

②では、「棕櫚」「榕樹」などの熱帯樹木をはじめ、数多くの植物名が見える。『美術上の釈迦』に付く「索引」を参照すれば、「菩提樹」「沙羅双樹」などの樹木名が見受けられるが、②ほど多くない。芥川が何か仏教植物図鑑のような書物を同時に読んでいたかと想像される。「全印度が……」にも樹木名が幾つか出ており、「檳榔樹の葉を噛んでいるやうな心もちがする」「合歓（ネムノキ、引用者注）の花のにおひがした」「所々菩提樹が銀茶色の芽をふいた往来」などの用例がある。

ちなみに、表紙に書写されている「貝多羅葉」という樹葉名も芥川がこの時に触れたであろうか。貝多羅葉とは、古代インドで経文を写した多羅樹の葉を指し、紙の代わりに書写の用を為す用具である。流布している読み方は「ばいたらよう」とされるが、石割氏は、「芥川自身「かいたらば」と読んでいた可能性」があり、「「書いたらば」の意味を持たせた洒落である」と述べている[8]。ノートの標題として使われていることからして、石割氏の意見はたぶん間違いなかろう。貝多羅葉は経文を写すための用具であることを芥川が知っているとすれば、このノートは最初、仏教文学に関するメモを記そうとしたものとしての使用意図があったかもしれない。

③は「釈迦が悪象を伏す」という仏伝説話に関するメモ群である。この仏伝説話は「全印度が……」の中で用いられていないが、同じく『美術上の釈迦』から書き記したものと思える。芥川が『美術上の釈迦』を参看したことがこの一段のメモで明確に提示されているので、やや冗長になるが、『美術上の釈迦』の第七六節「提婆の分立」（pp. 222-223）の記述を引用する（以下、全ての下線は引用者）。

> 時に王舎城に一大象あり、那羅祇梨（Nālāgiri）と名く。性猛悪にして能く人を殺す。提婆王舎城に至りて象厩に入り、象師に告て言はく「我れ王の眷属にして寵遇頗る厚し、好んて人を登用し、待遇を進む。喬答摩沙門此の大道に来るを見れば、悪象那羅祇梨を放ちて、喬答摩に向はしめよ」象師即ち之を諾す。佛、明旦衣を着け、鉢を執り、比丘衆を将ゐ、城に入りて食を乞ひ、大道に進む。象師之を見て、悪象を放ちければ、悪象長鼻を擧げ、耳尾を立て、佛に向て狂奔し来る。比丘衆之を見、怖畏の念を生じ、佛に勧めて路を轉じ、以て悪象を避けんとす。佛比丘衆に告て言はく「諸比丘よ、我に従て来れ、恐るゝこと莫れ」時に人々報を得て高樓に上り、其光景を見る。外道愚者相謂て言はく「大沙門威容端正なるも遂に悪象の禍を受けん」。信解の智者

相謂て言はく「獣象将に法象と戦はんとす」。佛慈心を以て悪象を伏し給ひければ、悪象忽ち柔和となり、長鼻を垂れ、静に佛の所に至りて止れり。佛即ち右手を以て象額を撫し、哀愍して教を垂れ給ひければ、那羅祇梨長鼻を以て恭く佛前の塵を拂ひ佛を禮敬して去れり、

引用文における下線部を抽出して連結すれば、③の一段のメモ（冒頭の文と末尾の文を除く）とほぼ同一のものになる。この仏伝説話は、「 1-2 」にある仏伝説話と共に、釈迦の神通力と非凡さをよく現している説話として、当時の芥川の興味を引いただろう。

以上で考察したように、「 1-2 」「 1-3 」のメモ群は、ほとんど『美術上の釈迦』の記述から取ったものである。そのうち、「 1-2 」にある仏伝説話などは、「全印度が……」の創作に取り入れられた。そのため、『美術上の釈迦』が「全印度が……」の一典拠であることは結論づけられよう。

同書の「序」によれば、『美術上の釈迦』は、著者の堀謙徳がロンドンの大英博物館とジャワ島ボロブドーア寺院での合計で七五図の仏教彫刻図の写真を挿入しながら、対応箇所で「図解」と「典拠」を付してその彫刻図の詳細について解説している書物である。「典拠」の部では、彫刻図の内容と相応する釈迦の伝記伝説が、纂訳された仏典本文で紹介されている[9] 。仏教美術と仏伝説話両方が満喫できる好書物として、堀謙徳の代表的著作の一つにもなっている。芥川の『美術上の釈迦』の入手経路が確認できないが、大学時代前後で執筆とされるもう一つの未定稿作品「戦遮と仏陀」を書く際に、同書の第六四節「妖女の謀計」も利用したこと（注 7 の拙稿を参照）を合わせて考えれば、この書物には当時の芥川が相当な関心を寄せて、仏伝説話を渉猟するための重要な材源となっていたと考えられよう。

ただし、『美術上の釈迦』を通読しても、釈迦の入滅を背景に一物乞いの惨死を描いた説話を見出せない。「全印度が……」は『美術上の釈迦』の内容を部分的に借用したと言えるが、物語自体もその書物に負っているとは考え難い。この物語の大筋は芥川自身で創り上げたものか、ほかのなにかの典拠に仰いだものかという疑問が浮上することになる。

## 三、「全印度が……」とアンドレーエフ「歯痛」

和田芳英氏[10] は、アンドレーエフ「地下室」（昇曙夢訳、『早稲田文学』、明45・ 4 ）に造形されている底層社会で喘ぐ生活破綻者としての主人公像が「全印度が……」と共通していることを論じている一方、アンドレーエフのもう一つの作品、つまり「歯痛」（森鴎外訳、『趣味』、明43・ 3 ）も「全印度が……」と緊密な関係があると主張・検証している。「歯痛」のほうがもっと「全印度が……」と内容や構成などで関連性が見られるために、本節では、和田氏の論著と一部重なるが、アンドレーエフと「歯痛」を簡単に紹介した後で、「全印度が……」と「歯痛」のつながりを詳しく検証する。

ロシア作家のレオニード・アンドレーエフ（ 1871-1919 ）と言えば、現在、彼の存在は

歴史の流れの中に埋没したが、当時、世界的に有名な作家として、明治末期から日本文壇を取り巻いたロシア文学のブームの中で紹介対象の主軸になった一作家である。一九世紀末二〇世紀初頭、彼の文学はヨーロッパで大変なブームとなり、それが日本にも波及し、上田敏によって翻訳された「旅行」（『藝苑』、明39・1）を皮切りに、彼の文学が続々と二葉亭四迷、昇曙夢、中村星湖、森鴎外等によって日本に翻訳・紹介された。夏目漱石、小宮豊隆等の文学にも影響を与え、日本留学の経験を持つ魯迅・周作人兄弟の文学活動にも波紋を広げたという[11]。

森鴎外訳「歯痛」は独訳からの重訳で、『趣味』誌上に発表され、同年発行の鴎外の翻訳集『現代小品』（弘文館、10月）に収録された。四千字程度の短編で、粗筋は次のようにまとめられる（本文の要約と引用は『鴎外選集』第16巻（岩波書店、昭55、pp. 328-333）に拠る）。キリストがゴルゴタの丘で磔刑にせられる日のことである。エルサレムの商人ベン・トイツトが夜明けから激しい歯痛に苦しめられていた。妻は各種の薬を持ってきてその苦痛を減らそうとしたがあまり効かない。こんな具合でベン・トイツトは屋根に登り、キリストの受難の光景を眺めて気を紛らわす。その後、彼の歯痛は治り、妻、隣人の男と一緒に処刑地のゴルゴタへ磔刑にせられた者を見に出かける。道中、ベン・トイツトは隣人の男に自分の歯痛の一部始終のみを語ることに熱中しているほどである。

「歯痛」と「全印度が……」は大筋の面において対応関係があると思える。「全印度が……」を先に見ると、この作品は釈迦の入滅を背景に持ちながら、仏の救済を得ないまま、取るに足りない一物乞いが惨死する様を描いたものである。それに対して、「歯痛」は一商人の些細な歯痛事件をクローズアップして物語るが、キリストの受難が重要な後景として裏側に対照的に描写される。換言すれば、両作品は、キリスト／釈迦の死歿（瀕死）をバックグラウンドに、その日に平凡な一人物の身に生じる出来事を語るという面で酷似する。芥川が「歯痛」を読んだとすれば、前節の末尾での疑問の解答になるが、「全印度が……」という物語の大筋は「歯痛」に負っているものとまず推定することができる。

後述するように、和田氏は主に両作品の冒頭部（前半部）を中心に類似性を検証しているが、登場人物の身分設定、物語の流れなどでも類似関係を見て取れる。「歯痛」ではキリスト教物語によく姿を現す「商人」を主役として登場させているが、「全印度が……」では仏教説話に馴染みが深い「物乞い」が主人公に選択されている。蓄財・裕福のイメージが深い「商人」と、行乞・貧困の意を内包する「物乞い」という主人公の身分も好対照となる。さらに、「キリストと一商人」、いわゆる宗教の開祖という「神聖・偉大な存在」と、世の中の一商人という「世俗的・卑小な存在」、このような人物上の対照関係が「歯痛」で意図的に施されている。無論、この登場人物上の対照関係が「全印度が……」における「釈迦と物乞い」という設定にも見られる。

そして、物語の流れでも両者は類似関係を呈示している。両作品は同じく冒頭で、主人公が病にかかっていた様子を描いている。その後、その身体的苦痛から抜けようとした方

法は、同様に別場所に移動するという手段である。「歯痛」ではベン・トイツトは各種の薬を試したが、効果がないので、自家の平屋根に登ってその上を行ったり来たりしている。「全印度が……」では、クシャラは苦痛の解消を図るという明確な意識を持っていないが、「小さな銀の蛇の飾りのある笛を拾った」という市での記憶がクシャラを愉快に感じさせたために、彼は「とうとう起きて市へ行くことにきめてしまつた」。また、その次の展開となるのは、両作品で、同じく移動後の場所（屋根／市）で、主人公がキリスト／釈迦の受難／瀕死の噂を聞いて、キリスト／釈迦と何らかの形で関わることが描かれているということである。「歯痛」では、「二三度子供が駈けて来て、ナザレの耶蘇の話を早口に話した。ベン・トヰツトは其度に立ち留つて一分間程額に皺を寄せて聞いてゐた」と記されているように、ベン・トイツトはキリストの話を子供から聞いた後、妻の助言でキリストが引っ張られて町を通る光景を眺めて、「往来の出来事を見物したので、ベン・トヰツトは多少気が紛れたらしい」とされている。一方、「全印度が……」では、「それから市の人たちの噂さで、（中略）沙門瞿曇がこの市の近くで病にかかつたが多分三日とはもつまいと云ふこと、（中略）を聞いた」とあるように、市でクシャラは釈迦の瀕死の話を知り、「悉達も死ぬのだ。自分のやうに死ぬのだ（中略）悉達のする事がうそなら、悉達の云ふ事もうそにちがひない」と思い込んで、この噂はクシャラの中で増大する釈迦への懐疑・怨恨の念へとつながっていく。

上記のような物語の大きな面のみではなく、文章中の表現、字句レベルの類似箇所も両者には顕著である。和田氏はこれを中心に、物語の舞台設定、主人公の病気、身体的苦痛などを表す描写などについて、両者の類似性を詳細に検証している。最も近似していると思われる部分、つまり両方の書き出しの文章を引用しておく（適宜改行、ルビは省略）。

アンドレーエフ「歯痛」（p. 328）

世界に又とない非法な事が為遂げられた、恐ろしい日のことである。耶蘇基督がゴルガタで、罪人の間に挟まれて磔刑にせられた日のことである。その日のまだやつと薄明るくなりかゝる前にエルサレムの商人ベン・トヰツトの歯が堪へられないほど痛み出した。実はこの痛みはもう前晩に始まつたのである。初は右の頬つぺたがちよいと引き吊る様で、知恵歯の前の奥歯が少し浮いたやうであつた。舌で障つて見ると少し痛かつた。

芥川「全印度が……」（pp. 346-347）

全印度が其嘗て有したものの中で、最も大いなる太陽を失つた悲しい日のことである。大沙門瞿曇が跋提河の近くにある沙羅双樹の林で涅槃に入つたかなしい日のことである。吠舎城の乞食クシャラは日暮からはげしい熱が出はじめた。尤もさう云へば今朝、薄明いうちに、町はづれ波羅門寺の後になる石甃の上で目をさました時にもう額が火のやうにほてつてゐた。そして、唇がしつきりなしに乾いて身体中が、なんとなくだるい。口の中も、檳榔樹の葉を噛んでいるやうな心もちがする。

両者の書き出しは瓜二つの感を与えている。芥川がそばに「歯痛」を置いて参照しながら執筆に取り掛かったように思わせる。和田氏に注目されていないことであるが、このような事実は「全印度が……」のノート断片からも窺える。引用文におけるクシャラの病状を述べる一表現（下線部）について、ノート断片では、数種類のバリアントが書き残されており、「熱（激しい熱）」のほかに、「頭痛」（「11」）、「腹痛」（「21」）も考案されていたようである。題名「歯痛」が示すように、アンドレーエフの小説で主人公の歯痛は全文を貫いている重大な事件であり、「歯痛」という言葉は核心的なキーワードとして、全文で重要な位置を占めている。クシャラの病状に拘泥していた芥川の態度から、「全印度が……」の創作を始めるに際して、「歯痛」を模倣して自作を展開しようとした形跡を読み取れる。書き出し以降でも、芥川が「歯痛」の模倣をした表現が多く見受けられるが、詳細は和田氏の論著を参照すれば分かる。

芥川と「歯痛」の関わりについて、芥川は「聖ジユリアン物語」（未定稿、岩波版全集第22巻、平９・10、p. 309）で、「小生の好みより云へばジユリアンを除いて現代小品中「歯痛」「鴉」「白」などを面白しとすべき乎」と「歯痛」に言及している[12]。この記述から芥川が実際に「歯痛」に接したことが知られる。また、芥川が触れたそのテキストは原典（あるいは英訳など）ではなく、森鴎外訳の初出版（雑誌『趣味』）でもなく、森鴎外の翻訳集『現代小品』である可能性が高い。

「全印度が……」は「歯痛」を踏まえていると考えられるが、相違があるのも明らかである。例えば、「歯痛」では、ベン・トイツトのほか、その妻、隣人、町の人などの言動にも語りを加えているのに対して、「全印度が……」では語りのスポットが終始クシャラ一人に当てられている。尚且つ、物語は同様に主人公の病気から語り始めているが、「歯痛」では、最後にベン・トイツトの歯痛は治るが、「全印度が……」では、結局クシャラは熱病で無残に死んでしまう。最も重要な相違点を挙げれば、物語の中心が違っているということである。「歯痛」では、キリストの救済について、ベン・トイツトが軽口で嘲笑うという数行の筋書きのみが見られ、作中でさほど重大に扱われていない。物語の趣旨は、ベン・トイツト自身にとってキリストの受難より自分の歯痛のほうが大事だ、さらにはキリストの受難はベン・トイツトの歯痛と比べて全く重要ではないということまで読み取れる、荒唐無稽なほどの対比関係（軽重関係）にあるように表現されている[13]。「全印度が……」のほうでは、釈迦の死歿がクシャラの熱病と対比されず、どちらのほうが重要視されるかは、物語で中心として描かれていない。物語のクライマックス、つまりクシャラの中の釈迦への怨恨と釈迦の神通力、救済（慈悲）に対する懐疑の念が増大していく、という作品末尾での場面のほうが大事である。言い換えると、釈迦の瀕死の際に、その救済の不在がクシャラに与える影響と、クシャラにおける釈迦の救済への懐疑といった点こそ、「全印度が……」の中核になっているのではないかと考えられる。「歯痛」では、キリストの救済問題、及びベン・トイツトにおけるキリストの救済への懐疑に関してはあまり触

れられていない。これは両作品の決定的な違いである。

ただし、「全印度が……」における釈迦の救済への懐疑は、次に検討する木下杢太郎「印度王と太子」の中で看取することができるのである。

## 四、「全印度が……」と木下杢太郎「印度王と太子」

「印度王と太子」（一幕一場）は、木下杢太郎が東京帝国大学医学部の在学中に執筆した仏陀に関する戯曲の習作である。明治四三年五月『三田文学』（創刊号）に発表された後、彼の戯曲集『和泉屋染物店』（東雲堂、明45・７）に収録された。恒河に近いインドの一王国が舞台とされ、時代は釈迦出山の後程なき頃と設定される。戯曲は国王の俗世からの離脱、太子の情慾の沼に堕ちている憂悶、及び仏教世界への懐疑などをめぐって展開する。主題に関して、岡崎義恵氏は、「世尊の教によって救われず、官能的幻影そのものの中に生の不可思議を知ろうとして、滅びて行くものの悲劇」と見解を述べている[14]。

戯曲「印度王と太子」は六段からなる。各段の内容を簡潔にまとめると以下のようになる。第一段では、王宮殿堂の一室で国王は、病牀の上に凭れている太子に向かって、自分の境涯を語って、修行を怠らないように戒める。第二段では、廻廊の辺りより、太子は市の燈明と人影を眺めながら、自らの内心世界について独語をする。第三段では、首陁の子という人物が裏門より御殿に忍んできて、太子に市での蘇摩供犠祭の賑やかな光景を述べて、摩伽陁国の王子なる沙門瞿曇（釈迦）が今夜この市に到着することを伝える。第四段では、首陁の子の妹である美姫摩耶が呼ばれてきて、太子と享楽に浸っている最中、太子の旧友と自称する沙門伽闍という人物が登場する。第五段では、沙門伽闍は太子を沙門瞿曇の宗教に導き入れるように色々説くが成功しない。第六段では、太子は自分の胸臆を開き、沙門瞿曇とその宗教について皆に語りかける際に、美姫摩耶が注ぐ酒で死んでいく。

「印度王と太子」を芥川が参考にしたのは、次の類似表現を見れば明らかであろう。丸数字の表現は「全印度が……」からの引用である。黒丸数字の表現は「印度王と太子」（『木下杢太郎全集』第３巻（岩波書店、昭56・７）に拠る）からの引用である。適宜旧字を現行漢字に変える。

①（p. 346）

・吠舎城の乞食クシャラは日暮れからはげしい熱が出はじめた。

❶（p. 155）

・わが立つ時、わが寝る時、悲哀の水はわが瓶の内に奇しい響を立てたのぢゃ。丁度悪しき熱の襲ひ来る前に脇腹に痛の訪ひ寄るやうに。

②（pp. 347-348、p. 350）

・醜い片眼の波羅門が、紅い鸚鵡のやうな旃陀羅の女と通じて市を追はれたといふことを聞いた。

・旃陀羅の女と通じた片目の波羅門の事を思出して見た、

❷（p. 170）

・首陁の子　いやいや中々で御座りまする。ウグラの子が近よらむとする時に旃陀羅の女に通じて追はれたる片眼の波羅門が凄じい相をして虎のやうに叫びました。

③（p. 348）

・クシャラは唾を吐きながらからびた声で愚痴をこぼした。耳の中では、何匹となく黄蜂が集まつて呻つてゐるやうな音がする。

❸（p. 160）

・無数の蜜蜂が、小さい集団より散つて更に大なる舞踊の団を形造るときのうなりのやうに、声なき燈明の響音はわが耳を襲せむ許りである。

④（p. 347）

・畏提詞の王が持つてゐる黄金の首飾りには青い葡萄のやうな大きな真珠が十六嵌つてゐると云ふことと、

❹（p. 179）

・数々の青い葡萄のやうな真珠の玉が着物の裾に散りました。

「旃陀羅の女と片眼の波羅門」「青い葡萄のやうな真珠」といったユニークな表現からして、芥川が「印度王と太子」を参看してその表現を借用したのは間違いないだろう。

ちなみに、芥川が仏教文学に取材した、唯一発表された戯曲「青年と死と」（『新思潮』、大３・９）にも木下杢太郎の戯曲から受容した痕跡を見出せるようである。小林幸夫氏[15]は、「青年と死と」で芥川が三回まで用いた独特な用語「欺罔」はあまり一般的には使用されていない語彙であるが、木下杢太郎の戯曲「十一人の偏盲」（『朱樂』、大１・３）にはこの語彙があり、また、「青年と死と」における「唯一の実在」「騒擾」などの用語も「十一人の偏盲」に見られると指摘している。これは驚くべきことである。後年、芥川が「西方の人」（『改造』、昭２・８）で、「わたしは彼是十年ばかり前に芸術的にクリスト教を――殊にカトリツク教を愛してゐた。長崎の「日本の聖母の寺」は未だに私の記憶に残つてゐる。かう云ふわたしは北原白秋氏や木下杢太郎氏の播いた種をせつせと拾つてゐた鴉に過ぎない（岩波版全集第15巻、平９・１、p. 246）」と述べているように、従来、芥川と木下の関わりは南蛮文学の面で注目されてきたが[16]、以上の類似表現と同じ用語は、仏教関連文学の上でも影響関係があることを示している。

さて、「全印度が……」と「印度王と太子」に戻ると、内容の上でも影響関係が見られる。釈迦の救済への懐疑は、「印度王と太子」でも触れられている。戯曲の第五段では、沙門伽闍は太子を沙門瞿曇の宗教に導き入れるために、以下のような対話を太子と交わしている（p. 192）。

太子　　然らば唯沙門瞿曇に許り頼つてゆくのか。

沙門伽闍　如何にも左様で御座る。世尊は力の源で御座る。四つの真理は大燈明で御座る。

太子　　もし然らば沙門瞿曇が死んだ後には誰に頼るのだ。
沙門伽闍　世尊は死にませぬ。
太子　　その大燈明は消えたあとはどう致すのぢや。
沙門伽闍　大燈明は消えませぬ。
太子　　（中略）かくて彼の油が乾いた後には。

「印度王と太子」では、「彼の沙門は、偏へに梵にゆく法を説きながら梵の何物なるかを明にしなかつた。涅槃の楽を説き乍ら、涅槃の何物なるかを教えなかつた」という太子のセリフが提示するように、太子は仏教の根本的な価値観に疑念を抱いて、釈迦の宗教に身を寄せようともしない人物として造形されている。上掲の沙門伽闍との対話でも、太子は、「もし然らば沙門瞿曇が死んだ後には誰に頼るのだ」云々という釈迦の救済への懐疑についての質問を投げて、沙門伽闍が唱える観点に論駁する。

釈迦は瀕死であるためにその救済を得られず、クシャラが無残に死んでしまうことを描いたのは「全印度が……」である。この角度から言うと、「全印度が……」という作品は、「印度王と太子」で太子が投げている質問、つまり「もし然らば沙門瞿曇が死んだ後には誰に頼るのだ」という質問の延長線の上で、沙門瞿曇の瀕死（死後）の世界を具現化しているものではないかと思える。前節の末尾で述べたように、「全印度が……」の中核になっているのは、クライマックスの場面で表出されているクシャラにおける釈迦の救済への懐疑である。このような懐疑の念は、「印度王と太子」における太子が投げている質問に潜んでいる釈迦への不信の念と呼応している。類似表現から見て、芥川が「印度王と太子」を参考にしたことは確実である。それゆえ、「全印度が……」における内容と、「印度王と太子」における内容との一致は偶然ではなかろう。「全印度が……」は「印度王と太子」に触発された一面があると推測される。

## 五、「全印度が……」の執筆時期と位置付け

「全印度が……」の執筆時期については、葛巻は『図書』九九号における「全印度が……（仮題）」の「附記」では、「恐らく大正三年（一九一四年）以前に書かれたものと思ふ」と述べたが、『未定稿集』収録時に「（大正四年頃）」と作品末尾に付している。一方、「全印度が……」の関連メモが一高時代使用とされるノート「貝多羅葉 1」に書き留められていることから、石割氏は『資料集解説』で（p. 87）、「一高時代に記されたものが中心と見てよいのではないか」と異見を提出している。本稿で取り上げた諸典拠の「印度王と太子」（五月）[17]、『美術上の釈迦』（九月）、「歯痛」（一〇月）は何れも明治四三年に刊行されたもので、「全印度が……」の執筆時期は明治四三年末、或はその直後である可能性が高いと考えられよう。

明治四三年といえば、この年の九月、芥川（一九歳）は第一高等学校一部乙類（文科）に入学し、同級には倉田百三、久米正雄、菊池寛等という後年の人気作家がいた。文壇の

ほうでも記念すべき年である。四月には武者小路実篤、志賀直哉、里見弴等は人道主義のスローガンを掲げて『白樺』を創刊し、五月には後に「三田派」と呼ばれる新人作家の登場を促した永井荷風主宰の『三田文学』が創刊され、九月には小山内薫、谷崎潤一郎、和辻哲郎らが『新思潮』（第二次）を創刊した。これまで文壇の主流を成していた自然主義文学に明確な対抗意識を持ちながら、白樺派、耽美派などと呼ばれる同人らが活動し、いわゆる反自然主義運動が盛んになった頃である。

一高時代の芥川は、将来の自分に関して作家より歴史学者か哲学者のほうを考えていたようであるが、幼い頃から持続する強い読書欲は一高時代の彼を駆使して様々な種類の文学書籍を読み耽らせていたのは確かである。この時期に書き留めた「全印度が……」もその間の消息を伝えている。つまり、森鴎外の翻訳「歯痛」、木下杢太郎「印度王と太子」などの文壇の最新作を受容したことには、当時反自然主義運動という文壇の潮流に熱心に目を配っており、この潮流に乗ろうとしていた芥川の姿が示されている。後日譚となるが、芥川は同年入学の菊池寛ら、いわゆる「新思潮派」と名付けられる作家たちと共に後年にも、反自然主義の一大勢力となる。

「全印度が……」自体に戻ると、未定稿で中絶してしまっているが、後年の芥川の文学的特質を十分予見させる一試作と言える。アンドレーエフ「歯痛」をうまく換骨奪胎しただけではなく、仏伝説話めかすために『美術上の釈迦』の内容、『印度王と太子』の記述も巧みに織り込んだ。つまり、幾つかの典拠から発想と表現を取り入れて我がものとする。このような創作方法は後ほど「引用の織物」と称される芥川の一連の短編に広く応用される。執筆時期の早さからみて、「全印度が……」はこのような創作方法が試される嚆矢となった作ではないかと思われる。

また、この作のモチーフに注目すれば、「羅生門」と関係性があることは歴然である。庄司達也氏[18]は、物語の中の「薄暮の空間」、主人公の生存の状態、日が暮れて現れてくる「闇」などの点で「羅生門」と通底していると主張している。和田氏の論著では、「全印度が……」と「羅生門」の関連性がもっと詳細に考察されており、この作を「羅生門」の「原初形態」と評価している。本稿では、「全印度が……」の執筆時期を明治四三年末、或はその直後であると推定しているが、両者の関連性自体は否定できない。

最後であるが、この時代を生きていた多くの作家と同じように、芥川は早くも一高在学中から宗教的文学に関心を持ち、その関連の習作に手を染めた。これは無論、旧制高校で育まれた教養主義思潮の中で要求されている知識人の宗教的文学への関心と理解と関わると考えられる。「全印度が……」では、中核になっている主人公における釈迦の救済への懐疑に、木下杢太郎「印度王と太子」に触発された一面があると推測しているが、物語で宗教信仰に対立する側に立って理智的な目でそれを見つめる姿勢は、彼の後年の一連の宗教関連文学に共通しているであろう。

**付記・謝辞**

本稿は日本語日本文化教育研究会第41回研究発表会（2022年 3 月12日）における口頭発表、及び本学へ提出した博士論文に基づくものである。研究発表会ならびに審査会にて貴重な御教示を賜った先生方に心より御礼申し上げます。

---

1 『図書』九九号（ pp. 2-4 ）での本文と照合すると、『未定稿集』（ pp. 346-352 ）では、「瞿曇」「石甃」など難語に対するルビ振り、「寐」を「寝」、「 SOMA 」を「soma」とするような表記の変更などがなされたが、大した異同は見えない。以下、基本的に『未定稿集』のテキストを作品の本文とする。引用にあたっては、適宜漢字を現行のものに改め、ルビは省略した。

2 和田芳英氏と庄司達也氏の論考がある。後に詳しく紹介する。

3 『図書』九九号における「全印度が……（仮題）」の「附記」で、葛巻が「体裁は、普通の学生用大学ノオトの余白に、幾通りにも（非常に細かい、独特の文字で）書き改め、書き直されたものである。（それらの全部を、判読する事は、非常な困難を伴つた。―従つて、これらの文章は、厳密に云つて、作者と編者との共同作業に拠るものである―、」と説明している。ノート断片を見ても、葛巻が翻刻・編集するにあたって苦労を重ねたことは想像に難くない。現在、この未定稿小説は岩波版全集（全24巻、平 7 ・11～10 ・ 3 ）に収録されていないが、本稿で検討されているようなこの作に見られる同時代文学からの受容、及び芥川文学での位置づけを考慮に入れれば、やはり一考する価値があると思われる。近年、芥川の未定稿を含む直筆草稿の類が公開され、それを写真版で写した『芥川龍之介資料集』などが刊行されると共に、葛巻の編集方針、判読ミスなどが検討される傾向があるが、本稿では、それらを問題とし得なかった。

4 この四冊のノートの内容は何れも生前未発表。『未定稿集』で一部が活字化されたほか、「貝多羅葉 4 」の中にある「羅生門」と関連が深い草稿ノートなどが、岩波版全集（第23巻、平10 ・ 1 ）で「「羅生門」関連資料」という標題の下に翻刻された。全体的に見れば、活字になっていないものがまだ多い。

5 八行の漢詩文における二句「暁則竹鶏鳴焉　昼則佛桑放焉」は中国清代の文人である朱彝尊（ 1629-1709 ）の散文「秀野堂記」に出ている。

6 堀謙徳（ 1872-1917 ）は明治・大正期のインド哲学者である。明治三八年からハーバード大、コロンビア大での梵語学、英語学の修学を経て、四二年東京帝大文科大学講師となってインド哲学、梵語学を講じた。また、同大学のマックス・ミュラー文庫の整理に携わった。著書は『美術上の釈迦』のほかに、『釈迦牟尼伝』（前川文栄閣、明44 ・ 4 ）、『解説西域記』（井上哲次郎と共著、前川文栄閣、大 1 ・ 1 ）、『印度仏教史』（前川文栄閣、大 4 ・ 9 ）などがある（『20世紀日本人名事典』（日外アソシエーツ、2004 年 7 月）の項目「堀謙徳」を参照）。『美術上の釈迦』に関する説明は後に本文で行う。

7 この三行のメモと堀謙徳編『美術上の釈迦』の関連について、拙稿（「芥川龍之介「戦遮と仏陀」考：その材源問題、及び「奉教人の死」との関連を中心に」『日本語・日本文化研究』31、2021 年12月、 pp. 1(242)-14(229) ）で一部考察を行ったが、本稿では、それを含むメモ群を全面的に検証していく。

8 石割透「芥川龍之介について気づいた二、三のこと」『駒澤短期大学研究紀要』27、1999 年 3 月、 p. 2.

9 彫刻図の写真が挿入されておらず、仏伝説話のみを紹介する節もかなりある。そのため、『美術上の釈迦』は仏教美術（彫刻芸術）を解説する書物であると共に、仏伝説話を紹

介する仏伝文学の書物でもあると言える。

[10] 和田芳英『ロシア文学者昇曙夢＆芥川龍之介論考』和泉書院、2001年11月、 pp. 193-245.

[11] アンドレーエフについては、源貴志氏の論考（「漱石とロシアの世紀末文学－「それから」の周辺－」『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌』3 、2015年10月、 pp. 401-408）、加藤百合氏の著書（『明治期露西亜文学翻訳論攷』東洋書店、2012年12月、 pp. 316-322 ）、藤井省三氏の著書（『ロシアの影　夏目漱石と魯迅』平凡社、1985年4月、 pp. 25-41 ）などを参照。

[12] この繋がりに関しては、和田氏の論著に言及されていない。フロベール著「聖ジュリアン」（「聖ジュリアン物語」）と芥川文学について論じたものとしては、西原大輔「芥川龍之介「南京の基督」とフロベール」（『広島大学日本語教育研究』18、2008年3月、pp. 9-15）などがある。

[13] 「歯痛」の主題に関する解釈として、『鴎外選集』第16巻巻末にある解説（ pp. 398-399 ）で、小堀桂一郎氏は「歯痛」を「シンボリズム解説の一端をなすもの」とし、「奇想天外な、およそ人間の価値観の秩序を嘲弄するやうな話」と評している。梁艶氏は論文「周作人とアンドレーエフ：「歯痛」の翻訳をめぐって」（『野草』91、2013年2月、 pp. 151-152 ）で、周作人は「歯痛」を「「人道主義」の文学と見做していたはずである」と推測し、「ベン・トビットがイエスを全然理解できず、その苦痛および処刑に対して無感覚であったということは、まさにアンドレーエフが言った「不幸」であろう。周作人は「歯痛」を反面教師として、他者理解を呼びかけ、ベン・トビットと似ている人々を覚醒させようとしたのではないだろうか」と述べている。

[14] 岡崎義恵「木下杢太郎の象徴的戯曲」『島田謹二教授還暦記念論文集比較文学比較文化』弘文堂、1961年7月、 p. 492.

[15] 小林幸夫「芥川龍之介「青年と死と」典拠考：木下杢太郎「十一人の偏盲」をめぐって」『上智大学国文学科紀要』32、2015年3月、 pp. 161-177.

[16] 芥川と木下杢太郎については、野田宇太郎「木下杢太郎と芥川龍之介」（『大正文学論』高田瑞穂編、有精堂、1981年2月）が詳しい。

[17] ただし、これを収録する木下杢太郎の戯曲集『和泉屋染物店』は明治四五年に出版される。芥川がこれで読んだとすれば、「全印度が……」の執筆時期はまた二年ほど繰り下がる可能性がある。

[18] 庄司達也「芥川龍之介「全印度が……」覚書（読む）」『日本文学』44、1995年12月、pp. 66-69.